第32号
NPO 法人子どもたちの生きる力をのばすネットワーク
Newsletter 2023（令和5）年12月 5日　発行

のばす会・ネットワーク便り

本部事務局　〒 475-0817　愛知県半田市東洋町 1-8　アイプラザ半田 109，110 号室
080-1622-5717　代表理事　伊藤　敦
E-mail　nobasukai1993@gmail.com
http:www.f-school.jp/nobasukai

のばす会 30 周年記念特集号―居場所を求めて―

創立 30 周年を迎えるにあたり

代表理事　伊藤　敦

本会の創立 30 周年を迎えるにあたり、一言ご挨拶申し上げます。先ず、この 30 年間関わって頂いた皆様方のご支援に対し、心より感謝申し上げ、衷心よりお礼申し上げる次第です。本団体の活動場所をご提供頂いている半田市当局に対し、改めて感謝申し上げます。

さて、のばす会があいちコミュニティー財団による「事業指定プログラム＝(不登校の子供たちの自立支援プログラム)」に採択されたのは 2015(平成 27) 年でした。この年は、のばす会が、不登校が問題になりつつあった世間の動向に鋭く反応した時期であり、そうした本団体の存在を認識して頂いていたのが県教委であったと記憶しています。財団所属のフレンドレイザー、日本福祉大学の学生ボランティアの皆さんらと共に行ったさまざまな活動が懐かしく思い出されます。

「小中の不登校 29 万 9048 人（21 年度から 5 万 4108 人増加)、と公表される中（2023,10.5「中日新聞」）今後はなお一層の専門性の深化、経営基盤充実と後継者の養成に希望を託したいと思います。2020(令和 2) 年には、愛知県青少年育成県民会議より第 51 回青少年団体等の表彰を受けました。のばす会へのご支援ご協力が、今後とも続くことをお願いし、そして不登校に苦しむ子どもたちや親御さん、地域社会に大いに貢献できる NPO であることを心からお誓いする次第です。

のばす会 30 年のあゆみ

のばす会の 30 年のあゆみは大きく 3 つの時代に分けられます。

第 1 期　＜雁宿ホールでの相談活動＞　平成 5 年（1993 年）雁宿ホール和室

のばす会の前身である「ぶどうの会」が中心になって登校拒否（当時）で困っていた親御さんや学校の先生たちの相談活動から始まり、学生さんが一緒に来ていた子どもさんと遊んでくれました。

第 2 期　＜青年の家でのフリースクール＞　平成 12 年（2000 年）

活動場所を「青年の家」に移し、レディース半田の部屋をお借りして週 2 回のフリースクールを始め、「ＮＰＯ法人ぱお」の協力をえて、スポーツなどの活動をしました。

第 3 期　＜アイプラザ半田での居場所づくり＞平成 23 年（2011 年）

青年の家の取り壊しに伴い、活動場所をアイプラザ半田に移し、２部屋お借りし、週 4 回のフリースクールを始め、平成 25 年（2013 年）ＮＰＯ法人格を取得し、現在に至っています。

＜居場所を求めて＞

３０年を振り返って

伊藤　八千穂

30 年を振り返ると、多くのことがよみがえってきます。環境は多様化し親の考え方や学校の対応など、私たち「のばす会」の関わりは急速に変化して行きました。始めの頃は不登校問題に関わる者の各々の立場、考え方、受け止め方がいろいろで、反目したりして理解に苦しむことも多くありました。のばす会は民間組織（ボランティア団体）で、第三者の立場で子どもを真ん中にして、学校と家庭をつなぐ役割を担っていました。

朝起きられない。トイレから出てこられない子どもを無理やり登校させようとする親や教師、そうした光景が多く見られたのが 30 年前の状況でした。世間も学校も当初は、親の育て方が悪いとか、甘やかしだとか、そういう批判をよく耳にし、わがままだというレッテルを張られることさえありました。しかし、「こうした考え方を払拭しない限り、不登校解決の道はあり得ない。」と、私たちは、当初から思っていました。始めから誰も悪くない、あるがままを受け入れて、親に対しては否定的にならずに「育て直しを一緒にやりましょう。」と、励まし合うこと、この基本理念は 30 年前から今日迄ぶれることのないのばす会のスタンスとなりました。このことは不登校問題解決の創成期において、茨の道を歩まざるを得なかった多くのフリースクールがたどった歴史だったと思います。

当時、戸塚ヨットスクールを巡って様々な報道がなされる中、青年の家 (今のアイプラザの駐車場) でののばす会は隣室が県警の生活安全課の補導員室でした。そこに来ていた非行少年の 1 人は、「仲間が少年院を出てくる、ヤバイ」ということで、のばす会がかくまってあげたことがありました。階下の市スポーツ課に迷惑をかけた少年たちも、最後は感謝の言葉を述べ、勉学意欲を現すようにもなりました。不登校も非行も根は同じです。居場所とは、安心できる所、自信を持てる所、それを自由に選べる所が大切であると思います。今まで、のばす会に関わって下さった全ての皆さまに厚くお礼申し上げ、のばす会の発展を心より祈念申し上げます。

＜雁宿ホールで居場所づくり＞

雁宿ホールでの相談会

榊原　紀美子

私が初めて雁宿ホールの相談会に参加したのは、1994 年頃です。名古屋で不登校の子どもたちの進路説明会に参加した時、会場でのばす会の資料を手にしたと思います。のばす会の相談会は月 1 回雁宿ホールの和室でありました。和室は 4 部屋あり、親子・スタッフ全員の顔が見えるように座り、自己紹介・近況報告を皆で聞きました。スタッフは、現役の教師・元教師と母親が数人でした。親の苦しい胸の内をゆっくり聴いてくれますので、初めは涙が出ていても少しするとホッとした気持ちになったことを覚えています。「親の育て方が悪い」と言われたり、学校・病院に通い心も疲れ切った時ゆっくり聴いてくれる場所でうれしかったです。隣に部屋があるので親から離れることのできる子は、スタッフや学生と遊んだり勉強をしていました。少しずつ元気になってきた子どもたちには、月 1 回では足りず毎週通える居場所が必要になってきました。

雁宿ホール時代

村瀬　明子

今から、３０年ほど前のことだったか定かではありませんが、私が、小学校の教員として働いていたころのことです。私のクラスに学校に来れなくなってしまった子どもがいました。保護者から、その子の欠席理由を「学校に行きたくない」と言っていますと告げられた時は、本当にショックで辛かったです。それからは、私にできることと言ったら、学校からのお便りを届けるために家庭訪問をしたくらいでした。その頃、新聞で雁宿ホールで「不登校の子どもたちのことについて話し合う会」があることを知りました。子どもたちの気持ちを理解する何かが分かれば、との思いで雁宿ホールでの勉強会に参加しました。具体的な内容は忘れましたが、参加者の話を聞くうちに、原因をあれこれ考えて悩むより、今の子どもの気持ちが分かるようになることが大切だと思えるようになりました。そして、保護者と教員が子どもたちのために話し合っているこういう場があることに強く励まされました。

＜居場所を求めて－青年の家－＞

当時の様子

巽　幸代

私が初めてのばす会に来たのは月に一度の調理実習の日だった。あらゆる種類の器具や食器を備えたすばらしい設備の調理室で昼食づくりを楽しんだ。今の不自由さと比べると何と恵まれた環境だったことか。体育館が青年の家の隣りにあり、車移動なくて週に一度はバドミントンなど楽しむことができた。小さい子どもの好きな生徒は託児ボランティアに参加したりもできた。青年の家の最後の活動は東日本大震災の後、被災地に送るため、カップラーメン、缶詰、タオルなどの日用品などが市内各地から集められ、それらを種類別に仕分けしたり、数えたりするボランティアにのばす会も参加した。微力ながらもお手伝いができたことはとても良い経験になった。

かけがえのない場所

卒業生　A・S

私がのばす会を始めて訪れたのは，中学１年生の秋のことでした。学校に行くのが嫌で引きこもりになっていた私に母が勧めてくれたのがきっかけでした。のばす会を訪れると、スタッフの方が明るく迎えてくださり、自分の中で「無理してでも学校に行かなきゃ」という気持ちを変えてくれて私の居場所を作ってくれました。勉強を教えてもらったり，卓球やバドミントンなどの運動をしたりしました。のばす会に通い始めて行くうちに、私自身の気持ちの変化があり学校に行ってみようかなと思うようになり、中学２年生から少しずつ学校に通えるようになりました。その後高校、大学と進学し現在は自分らしく元気に生活が送れています。今でものばす会という場所がなかったら、あの時勇気を出して一歩踏み出していなかったらどうなっていただろうと思うときがあります。のばす会は私にとってかけがえのない場所でした。

雁宿ホール時代

卒業生　H・M

私は、今から 16 年ほど前の中 1 の頃、不登校になり、市の適応指導教室にも通えず「のばす会」に辿り着きました。当時の「のばす会」は青年の家という公共施設で週２日の開所でした。午前中は学習、午後は運動と余暇、というのが基本カリキュラムでしたが、個々の実態に応じた柔軟な対応がなされていました。私は朝が弱いため、午後のみの参加からスタートし、徐々に午前も参加できるようになりましたが、学習意欲は低かったため、数独や PC 弄り、携帯型ゲームなどをして過ごしました。午後はフリースクール「ぱお」と合同実施の卓球などで気持ちよく汗を流したのが印象深いです。その後紆余曲折ありつつも、中学に戻り、東京都の教職員として働き、現在は半田で新たな夢に向けて歩みを進めています。「のばす会」は昔も今も変わらない私の大切な居場所です。今後も「のばす会」が続いていくことを切に願うとともに、更なるご発展を心よりお祈り申し上げます。

スタッフの皆さんへ感謝をこめて

保護者　竹尾　裕子

20 年程前、娘がのばす会にお世話になりました。スタッフのみなさんがあたたかくゆったりと迎え入れてくださり、友達のような感覚で接してくれたおかげで、のばす会は娘の居場所となり、週２回、暑くても寒くても雨が降っても、バスや自転車で通い続けました。当時、青年の家には体育館があり、普段は身体を動かすことが少なくなりがちな子どもたちに、スタッフさんがバトミントン、テニス、バスケットボールなどで相手をしてくれていました。運動が好きな子でしたので、そんな活動を取り入れてもらい有難かったです。野菜の栽培や調理体験もしていたような記憶があります。また学生ボランティアの方が時々来てくれて、子どもたちのおしゃべりの相手や勉強を見てくれていました。初めての人と接し、話をする機会も意識的に作ってもらえていたと思います。高校進学を考える頃には、いろいろな情報を知らせつつ、娘が自分の今後に向き合う気持ちがもてるよう援助をしてもらえていたなと感じています。面接の仕方もレッスンしてもらい、一歩前に進むための背中を押してくれていました。

のばす会は不登校を経験した娘にとってはなくてはならない居場所であったと思います。スタッフのみなさん、ありがとうございました。

＜新たな居場所を求めてーアイプラザ半田ー＞

NPO 法人格の取得とネットいじめ依存症を巡る講演会について

伊藤　敦

特定非営利活動（NPO）法人の法人格取得は、2013(平成 25) 年の創立 20 周年記念事業と共に実現しました。それは、「不登校問題に関し、世の中の動向をいち早く察知し、地方都市にあって「のばす会」をいち早く立ち上げられた貴会こそ、NPO 法人格を一日も早く取得すべきです。」とする、当時の日本福祉大学教授で「あいちこども NPO センター」理事長小木美代子先生の助言に後押しされたもので、当時の代表理事伊藤八千穂氏も、NPO 法人取得の意欲を強くしたとのことです。

そして、NPO 法人化の勢いに乗じて、当時社会的問題になっていた「ネットいじめ・依存症の問題」に関して、何かすべきであると言うことから、まずネット依存関係の第一人者「全国 web カウンセリング協議会理事長安川雅史氏」にお願いし五市五町の後援を得て、アイプラザ半田の講堂で行いました。またこの種のテーマに関し、金城学院大学・長谷川元洋先生、愛知産業大学・今井昌彦先生らによる講演会を設け、NPO 法人格取得記念として花を添えることができました。

不登校で悩む親のためのお助け講座

赤松　由隆

平成 29 年より不登校で悩む保護者の方が少しでも元気になり、手助けになるように専門家の話を聞こうと半田市市民活動助成金をうけ「不登校で悩む親のためのお助け講座」を始めました。親の会の方々には司会等お手伝いをいただきました。

第１回は不登校の子を持ち悩まれた保護者のお話や小中学校不登校だった学生のお話で、貴重な体験を聞く事ができました。その後、発達障がいやカウンセリングの基礎など６回開催しました。平成３０年には特別支援学校の様子やゲーム依存、聞き上手になろうなど４回講座を開催しました。平成３１年度は少人数での座談会の必要性から米村臨床心理士の司会で３回の座談会と「聞き上手になろう」の講座をあわせて４回開催しました。

不登校・引きこもりの問題の背景はそれぞれ違いますので、適切なテーマの講演会や座談会を開催してきました。その中で専門家の司会による少人数の座談会は大変有益であり、共通の話題で話し合い共感を深めることの大切さを改めて感じました。のばす会にかかわるスタッフや親の会の方々にも少しは研修の一助にはなったと思います。

のばす会のロゴマークの誕生について

伊藤　八千穂

のばす会が NPO 法人を取得した 2013(平成 25) 年、記念にロゴマークを作ろうと言う話が持ち上がりました。ニュースレターやパンフレットには特にロゴマークが必要です。しかし、なかなか良いアイデアが生まれません。当時絵の得意な T さんと、インターネットで調べてくれた F さん二人が一生懸命考えてくれました。アルファベッドの N は、のばす会の N とネットワークの N、そしてその N は豊かな土壌。その土壌を耕し、子どもたちの一人ひとりの持つ良き種が撒かれる。やがてそれは芽吹き豊かな実を実らせる。N の先端の二葉が付いているのはそう言う意味があるからです。私も子供たちと共に考えた一人としてこのロゴマークに満足しています。発案者の F さん、今は子育て真っ最中、貴女方の発案によるロゴマークは、これからものばす会をリードして行ってくれることでしょう。

＜フリースクールという居場所の中でーアイプラザ半田ー＞

Ｙ君の思い出

伊藤　敦

もう 10 年以上前の話になるが、JR 乙川駅前で当時のばす会に来ていた Y 君を見つけた。休みがちで、中学校の生活もいじめとともに孤立無援。その時私は、彼自身、心を許せる友人も声掛けしてくれる教師も皆無だと言っていたのを思い出した。後続の車が困ることを承知で、そのまま駐車し、彼の下に駆け寄り言い放ったものだ。「いいか！とにかくのばす会の俺のところへ来い！」と。私も必死だった。「俺のところへ来い」、と言ったものの、何もできず、ただ、彼を信じるしかなかった。その後長い時間彼と会うことはなかったが、11 月になって突然電話がかかってきた。その際、「自分も反省すべきであった。」と、成長を窺える一言。来年からは大手自動車会社の現場で働くことが確定している。最後に一言。中学校時代、Y 君を思う友人や教師は必ずいたはずだと私は信じている。

私がいた頃のフリースクール

卒業生　A・K

私がいた頃は、英語や数学などを教科書にそって一対一で先生に教えてもらった。他には、みんなで百人一首や坊主めくり、トランプ、ボードゲーム、人狼ゲームなどをみんなで楽しんでいた。軽運動室では、卓球やダンスをしていた。卓球ではみんなで試合の様に戦ったり、ダブルスで行ったりしていた。また、卓球しながらしりとりを行ったり、何かルールを付けてみんなで遊んだりしていた。

また、みんなでダンスをしたり、それを講堂や文化祭などで発表したりしていた。私は、裏方の仕事などを手伝っていた。みんなで考えてお菓子を作ったり、木曜日の二部の時にはサンドイッチを作ったりなどをしていた。その時期にあった野菜などを畑で作ったりしていた。みんなで刈谷の交通公園に行ったりなどの行事や私は行っていないが日間賀島の旅行などの行事があった。色々な楽しい行事があった。

心からありがとう

保護者　新原　由子

現在 24 歳の息子ですけど、息子が中学 2 年から 3 年になるまでの 1 年間、のばす会 にお世話になりました。発達障害の二次障害になり、まだまだ落ち着かない時で受け入れ先がなく、最後に電話した「のばす会」で、「お母さん大丈夫、来て下さい」と言って頂いた時の嬉しさは今でも忘れません。

のばす会に行ってみると、たくさんの子達がいました。個性の違いはあっても、そのままのその子を自然に皆んなが受け入れて助け合い、それぞれのやり方で勉強したり、楽しくお喋りしたりもしていました。落ち着きがなく不安が強い息子も、毎日、毎日、周りの皆んなから話しかけてくれて、ゆっくり馴染んでいきました。ゲームをしたり、体育館でバスケットをしたり、楽しく過ごしているうちに、症状も少しずつ落ち着いてきて、中学３年には特別支援学級にもどり、半田特別支援学校高等部も元気に通い、現在は福祉事業所でお仕事しています。どこも受け入れ先がなく、困り果てていた時、救ってくれた「のばす会」、そのままでいいんだよ、大丈夫！と励まし続けてくれたスタッフの方達や皆んなのおかげで今の息子がいます。心からありがとうございます。

まさか自分の子が

保護者　　榊原　涼子

のばす会が 30 周年と聞いて驚きとともに続けてこられたスタッフの方々の努力に頭が下がります。私たち家族とのばす会との繋がりは息子が小学４年生、今から約７年前になります。友達も多く活発な子だったので、まさかうちの子が不登校になるなんてとはじめは戸惑い、どうすれば良いか分からず不安の日々を過ごしていました。そんな時、のばす会の存在を知り、同じ悩みを抱える子たちやスタッフの方々と共に過ごしていく中で安心できる居場所となり親としても心強い存在になりました。そしてそれが自信に繋がり中学、高校へと進学する事ができ、現在は体調と相談しながらのんびりとした生活を送っています。焦らなくてもいい、生きていればなんとかなる！のばす会と出会ってそんな風に思える様になりました。いつも温かく見守って下さるスタッフの方々のお陰です。これからものばす会の活動を多くの方に知って頂き、不登校に悩む子どもたちの未来が明るいものになる様にと願っています。

＜居場所を支えて＞

カウンセリング研究会のはじまり

臨床心理士　米村　高穂

2015 年 3 月より始まったカウンセリング研究会のきっかけについてお話ししてみたいと思います。当時の伊藤八千穂代表理事と私の母が知り合いだったことが御縁でお声をかけていただきました。一度は仕事を理由にお断りしましたが、私の臨床心理士の出発点が自身の不登校体験ということもあり、子どもたちの力になりたいという気持ちは持ち続けていました。カウンセリング研究会では月 1 回、和やかな雰囲気の中でそれぞれが感じていることをおしゃべりしています。それがアイデアとなって、保護者が安心して語り合える「座談会」、子どもの不登校で悩んでみえる保護者に向けた「お助け講座」、私が感じたことをカウンセリング研究会で話し合った「臨床心理士のぼやき」など、少しずつ形となっていきました。今後も、のばす会が「居場所」として、子どもたちや保護者の方が安心して自分を出せる場であり続けることを願っております。

ハートルーム、寺子屋事業の立ち上げ

伊藤　里香

子ども達のことで困っている保育園や小学生の親の相談と、子ども達のプレイルーム（居場所）として始まりました。お母さん方の心の重荷が少しずつ軽くなると不思議なことに子ども達も笑顔が戻り、友だち遊びができるようになってきました。月に一度のハートルームで子ども一人ひとりがやりたいことが言えるようになって楽しい企画を考えました。オープンサンド、恵方巻き、ケーキなど作って、お母さんも一緒に楽しみました。中庭では、ままごと、かくれんぼ、おにごっこ、ボール遊び、室内では、太鼓やベル演奏、絵や工作もしました。子ども達も親もハートルームで、心も体も成長できたように思います。長期休暇時の学習と生活支援事業として、市と事業協定している寺子屋には、ハートルームの子ども達、フリースクールの児童生徒、寺子屋のみ参加している小中学生、フリースクールを卒業した高校生と、所属も学年も様々な子ども達が一緒に過ごしています。のばす会ならではの居場所となっています。

親の会のはじまり

親の会　松原　美花

当時伊藤八千穂さんの所には毎日の様に学校でつまずいた子供たちを取り巻く親御さんからの相談や子供たちからの助けを求める声が後を絶たなかったそうです。生涯をかけて全ての子供たちの為に一緒に心を痛め，泣いてくれる、まるでマザーテレサのような八千穂さんでした。何とかして学校に行けなくなってしまったお子さんを持つお母様の心を軽くしてあげられないだろうかと考えたあげく、のばす会で子育てに悩むお母様方が何でも自由に話せる場があれば少しは気持ちが明るく持てて家に帰って行ける、それを真剣に聞いてあげられるのはやはり同じ悩みを抱えるお母様たちの他にありません。

そこで、当時、一緒にお手伝いをさせて頂いていました不登校児を持つ私が、いつの間にか担当させて頂きました。皆様のご協力のおかげで今 20 名のお母様方が集うおしゃべり会となって、今なお継続しております。

二部学習支援

伊藤　八千穂

のばす会では、木曜日の午後 3 時から 5 時まで、不登校を経験している中高生を対象に、日本福祉大学の学生が学習支援を行っていました。そもそものきっかけは、市内で居場所と学習支援を行っているアンビシャスネットワークの皆さんが、団体設立当初、学習支援をする場所を探している時の出会いでした。帰り時間の最後の 3 分間の「ミッチータイム」は毎回楽しみで、生徒たちが自主的にテーマを見つけ、徹底的にぶつかり合う姿は生きる力そのものでした。自分で考えたことを言葉にする共に学び合うすばらしい瞬間でした。この時期、勉強でつまずいている所をテストしようと生徒たちが 5 教科問題作りをして、テストもしました。いろんな思い出があります。コロナ禍を経た現在の二部は、大学生による学習支援の再開こそ待たれますが、居場所として中高生が中庭でバドミントンやボール蹴り、室内でおしゃべり、読書、勉強したりと、安心して過ごしています。中高生にとっての大学生は、少し年上のお兄さん、お姉さんとして親しみやすく、良い刺激がもらえる存在です。以前のように大学生が来てくれる環境にしたいです。

フリースクールは今

新村　由美子

二学期になって少し参加人数や体験者が増えてきました。多い時は 10 人になることも。男の子の割合が多く、時には、“もうちょっと静かにして〜”と注意することもあります。（中には静かな環境を好む子もいますので配慮しています）各自、勉強したり友達やスタッフと遊んだりして過ごします。夏には池の中のオタマジャクシにみんな夢中になりました。毎日池を覗きこみタモでオタマジャクシをすくい、バケツに入れて足が生えてきたかなと観察し、また池に戻し、を繰り返していました。ですが知らないうちにカエルになり（夏休み？）どちらかというとトンボの方が大量発生していました。毎日捕まえられるカエルにとっては迷惑な話ですが、みんなで一緒にワイワイ賑やかに観察でき、楽しいひと時でした。

第 25 回登校拒否・不登校問題全国のつどい in 京都」に参加して

登校拒否、不登校問題、全国の集いに行ってきました。1 日目は高垣忠一郎氏の講演、分科会 (居場所とは)、2 日目は基礎講座で登校拒否、不登校について学び、分科会にも参加。高垣先生の講演を聞き自己肯定感について誤解していたことに気が付きました。それまで私は子供に自信を持たせる何かを見つけてあげることが手助けになると思っていて自信がつけば自己肯定感が持てると思っていました。しかしその場合、もしその何かを達成できなかったり挫折したりした場合、益々状況は悪くなり自己否定になってしまう。大人は評価できる部分にのみ目が行きがちだが、子供は周りの期待に答えて褒められるように行動したり、失敗を過度に恐れたり期待に応えられない自分を拒否するような事態になることもある。ダメな部分もあるけれど在るがままの自分の存在を肯定するのが自己肯定感であり、周りは失敗しても大丈夫と受け入れてあげることが大事である。それによって子供は愛され理解されていると感じることができるそうです。のばす会は家庭に次ぐ居場所であり子供達が安心して過ごせる場所でありたいと思います。

新村　由美子

人は甘やかすとダメになるのか？自律を急いでいませんか？

臨床心理士　米村　高穂

私たち子どもに関わる人は、最終的には子どもが自分の人生を自分のものとして生きていくこと、つまり自律・自立を願っているというのは共通点でしょう。その反動からか、不登校の子たちや子どもに関わっている大人から「甘やかしている」という言葉をよく聞きます。先日、滋賀県東近江市長が「フリースクールが子どもをダメにしている」と発言したことがニュースになっていました。大抵の場合、このように批判的なニュアンスで使われているように思います。このような発言は、子どもたちや保護者への敬意に欠ける問題発言ですが、一方で私は、子どもたちが自律に向かうまでのステップを知らないことも問題だと思いました。

「発達は飛び級ができない」という言葉があります。人が本当に「自律」するまでにたくさんの経験が必要です。それを発達心理学では発達課題と言って、「段階」に分けているのですが、この点は見逃されているように感じます。だから、例えば学校に行けない状態にもかかわらず、「甘えるのはいけないこと」と思って、無理やり、もしくは子どもに交渉事を仕掛けて学校に連れて行くといった「一足飛び」のような対応になっているように思います。見た目は小・中学生だとしても、子どもの成長には個人差が大きいのです。これは不登校の有無に関係ありません。ある部分は、まだまだ幼児期の段階にあって「甘える」ことが何らかの形で必要な段階もあります。そうすると、「甘やかすな」という発言は、却って子どもの発達を阻害する言葉になる可能性もあります。「発達には段階があり、飛び級ができない」という認識も大切でしょう。充分に甘えられた子が大人になれば、「甘える」が「相談する」「助け合う」ことに繋がっていくと思います。そう考えると、むしろ子どもの頃は「うまく甘えること」も大事なのではないでしょうか。

夏休み寺子屋の様子

伊藤　里香

７月､８月に７日間開催した夏休みの寺子屋には､小中高生 20 名が参加しました。夏休みは例年､日本福祉大学の大学生がサービスラーニングの活動として､今年度も４名が参加してくれました。学生企画として､大学生が軽運動室で､輪投げペットボトル､新聞ちぎり長さ比べゲームをチーム対抗でしました。のばす会の寺子屋は、小学校低学年から高校生までの異学年が一緒に活動します。大学生が企画したゲームは、参加したみんなで楽しくできました。コロナ禍の中、しばらく出来なかったおやつ作りも、かき氷とたませんを作って夏祭りの雰囲気を楽しみました。かき氷は、ブルーハワイのシロップが大人気でした。たませんを食べたことがない子やスタッフもいて、はじめて食べるたませんは、みんなで食べると一段と美味しく感じた様子でした。

のばす会 30 周年記念講演会（文化祭）のご案内

日時：令和６年１月 27 日（土）13 時 30 分～ 15 時
場所：アイプラザ半田　２階小ホール
講師　伊藤八千穂（元代表理事）
テーマ：ーのばす会 30 年を振り返ってー

今後の予定と活動

のばす会の終業	12 月 22 日（金）
冬休み寺子屋	12 月 25 日（月）～ 27 日（水）
のばす会始業	１月９日（火）
のばす会 30 周年記念講演会（文化祭）	１月 27 日（土）13 時 30 分～
のばす会終業	３月 22 日（金）
卒業・修了を祝う会	３月 23 日（土）10 時～

ご協力ありがとうございました。皆様の志が子どもたちの未来へとつながります。

＜寄付者の皆さま＞　令和５年８月～ (掲載可の方々です)　順不同　敬称略
山内睦代、九澤郁子、伊藤恵造、大橋晴美、山田ゆき、山本住代、小出由里子、石黒雄大、松本涼子
西川理恵、加藤正三郎、稲垣豊、霊池恵広、浅倉洋子、市田多美恵、柴川久仁子、内田榮一、谷川三希子
石川まさ恵、吉田美佑紀、榊原友恵、松原美花
＜ろうきん寄付システムの皆様＞　令和５年 11 月末まで　＊ご寄付ありがとうございます。
＜商品券寄付＞　村上眞喜子
＜書き損じはがきの寄付＞　榊原友恵
＜物品の寄付＞教材、文具、漫画本 30 冊、お菓子（バームクーヘン、お土産等多数）
＜半田市社会福祉協議会＞　アイスクリーム 18 個入り１箱
＜支援物資＞　・筒井工業 KK　お米１０キロ１袋
・こどもサポート証券ネット（・立花証券 KK－レトルトカレー 102 食分　・岡三証券 KK―お米２キロ２袋
・岩井コスモ証券 KK　お米５キロ２袋　）
・三井弥生―お米５キロ１袋。カップ麺 12CAP 入り３箱・杉浦珠実―非常食品４箱　・佐々木恵子―お茶１箱

皆さんの寄付でのばす会は成り立っています。ご支援ください。
年会費・寄付金の振込先　□年会費 2,000 円　□寄付金１口 1,000 円から

①知多信用金庫　美原支店　口座番号　普通　2102161
名義：特定非営利活動法人　子どもたちの生きる力をのばすネットワーク
②東海労働金庫　半田支店　口座番号　普通　4500549

名義：特定非営利活動法人　子どもたちの生きる力をのばすネットワーク
代表理事　伊藤　敦
③ゆうちょ銀行　振替口座　口座番号 00810-9-154412
加入名：特定非営利活動法人子どもたちの生きる力

編集後記

のばす会がその時々の皆様に支えられて 30 周年を迎えることができました。それぞれの時期の様子が分かればと 30 周年記念号を発刊します。これが次につながる契機になればと思います。皆様のご協力を心より感謝いたします。

編集　赤松 由隆